寂聴記念会だより

題字　島田聖翠

第４号
2024年
５月15日発行
瀬戸内寂聴
記念会

皆様、お変わりございませんか。青葉の季節になりました。

五月は寂聴さんの誕生月。今年は生誕百二年です。五月末には遺句集『定命』が刊行される予定です。

「寂聴とインド」展開催中

現在、徳島市の文学書道館で「寂聴とインド」展が開催されています。

寂聴さんはパスポートで確認される限り、１９７７年12月から２０００年２月までに８回インドに渡っています。出家後の55歳からです。釈迦ゆかりの地を訪ね、その風土の中で人々と出会い、釈迦が歩いた道をたどり、大地の記憶している声を足の裏から伝え聞いたことでしょう。そして80歳のとき、『釈迦』を書き上げました。

『釈迦』は従者アーナンダの言葉で終わります。

「私はこのように聞いた。世尊のお言葉のままである。

——この世は美しい
人の命は甘美なものだ——」

ガンジス河に入る寂聴さん（寂庵提供）

展覧会では８回のインド人の旅が写真やノート、旅のエピソードが盛り込まれた著作などと共に紹介されています。

総会のお知らせ

６月２日（日）午後２時～３時
文学書道館にて

出欠予定を24日までにお知らせください（メール・ファクス・葉書のいずれかで）。総会後、寂聴さんのナルト・サンガでの法話のＤＶＤを30分ほど鑑賞します。

「女子大生・曲愛玲」を読む

「寂聴文学を愉しむ会」・第１回

４月19日、第１回の読書会が開かれました。12人の参加者は、それぞれに感想を述べ、他者の読み方を参考に違った見方に気がつき、読みを深めたようでした。

実質的な文壇デビュー作で、新潮社同人雑誌賞を受賞しました。佐藤春夫や三島由紀夫らの選評は総じて、レズビアンラブの「官能性」を推す、ということでした。しかし注意深く読み、作者が没した今となっては、「恋と革命に生きた女たち」の萌芽を感じさせる作品でもあり、様々な顔をもち、占領下の北京で日本人を翻弄した美しい女子大生の奔放な姿が魅力的に、謎めいて描かれています。十の仮面を持つといわれた北京人と単純な日本人、占領側と被占領側、内地と外地、体制側の人間と非体制側の人間、そういった要素も対照的に描かれています。

参加者の感想はnoteに詳しく報告されています。

第２回は６月21日午後一時半から
「吐蕃王妃記」（『白い手袋の記憶』から）を読みます。

「瀬戸内寂聴年譜」完全版刊行

文学書道館では２０１４年で終わってい た寂聴年譜に亡くなるまでの10年を補足して完全版を刊行しました。

出来事、発表作品、連載、著作を年ごとに記しています。たとえば大作を三作も四作も同時に手がけていたというような超人的な仕事ぶりがひと目でわかるようになっています。全著作も網羅しています。ミュージアムショップで５００円で販売中です。

遺句集『定命』刊行予定

寂聴さんが亡くなった後、寂庵の書斎を片付けていた秘書がおびただしい句稿を発見しました。生前、自費出版した句集『ひとり』が思いがけず星野立子賞や桂信子賞を受賞して以降、句作は寂聴さんの愉しみになっていました。そして、生前にもう一冊出したいと口癖のように語っていました。願いがかなって**句集『定命』**（定価２，２００円　税込　小学館）が五月末、刊行される予定です。

記念会では刊行を記念して、**５月31日（金）午後一時半**より、文学書道館で**「句集『定命』を読む会」**を開催することになりました。参加ご希望の方はお知らせください。句集を注文いたします。

石山寺訪問記

3月11日、記念会理事有志で滋賀県大津市の石山寺を訪問し、お二人に訪問記を書いていただきました。

石山寺訪問

本田耕一

徳島市から新吉野川大橋を北に渡ると直ぐにコンビニがある。約束の時間に駐車場で待っていると、フロントガラスに「瀬戸内寂聴記念会」のプレートを付けたマイクロバスがゆっくりと入ってきた。

ドアが開き、ステップを上がり挨拶をすると事務局長が最前列の席を指さした。運転席の左側、最も景色が良く見える特等席だ。マイクロバスを改造した貸し切りジャンボタクシーは座席の位置が高くて視野が広い。

座って前方を向くと、突然に40年ほど前にアメリカ大陸を旅行したことを思い出した。私はまだ20代で憧れのアメリカ合衆国を何でも見てやろうと意気込んでいた。アメリカを体験するなら飛行機で都市間を移動するより、列車やバスのほうがいいとガイドブックにあった。全国網を持つグレイハウンドバスで長距離移動するのが路線も便も多くて便利だと教えてもらった。もちろんお金のないそのころの私には何よりも料金が安かったということもある。確か日本円で7万円くらいの3週間乗り放題のバスチケットをポケットに入れ、大陸を縦横無尽に動き回った。

乗車時にはバス停の最前列に並んで、真っ先に乗り込み運転席の反対側最前列を確保した。まるで自分で運転しているように昼も夜もアメリカの自然や街並を見続けた。

ふと我に返り外を見ると、清々しく抜けるような青空。そして3月とは思えないような暖かさ。窓からは徳島名産のレンコン畑、鳴門金時を育てる砂地が見える。農作業が本格的に始まる前の静かな風景だ。最近開業した道の駅「くるくるなると」の駐車場には車がいっぱいでガードマンが忙しく整理している。まもなく鳴門ＩＣの料金所を通過し、高速道路に入る。しばらくすると豪快な渦潮で有名な鳴門海峡に架かる大鳴門橋がある。この橋を渡ると兵庫県淡路島だ。後部座席からは、にぎやかな話し声や笑い声が聞こえてくる。大人になっても遠足気分のわくわく感が伝わってくる。

そういえば、コロナ流行前にジャンボタクシーで瀬戸内寂聴先生に会うため京都寂庵に有志で行ったことがある。寂聴塾40周年の相談も兼ねてのツアーだった。元気な寂聴節も聞くことができたので、来年また会いましょうと約束したのに、それ以来コロナで会うことがかなわず、先生は帰らぬ人となってしまった。会える時に会っておくことの大切さを思い知らされた。

バスは快調に高速道路を進む。淡路島は玉ねぎの産地で名高い。作付けされた緑色の葉が畑に広がっている。収穫された玉ねぎを保管する風通しのいいスケルトンの小屋も見えるが今はがらんとしている。

なだらかな山中を進んでいくと道沿いに次々とアンテナのような鉄塔が目に入ってくる。携帯電話の無線局だ。同じような場所に違った形のものが設置されており、既存3社に加えて、比較的小型で真新しいものはたぶん新規参入した楽天のものと思われる。

淡路島北部に来ると突然視野が開け瀬戸内海が広がる。道路は高台なので対岸の大きなビルのようなものや発電所の煙突がぼんやりと見える。大きな貨物船が大阪湾に向かっている。

明石海峡大橋の手前のサービスエリアで休憩。徳島県人は大橋を渡ると本州というか都会に入った感覚になる。長いトンネルを抜けて阪神高速や名神高速を通っていくのかと思っていたら、いつまでも内陸の高速道路を走っていく。切り崩された山の中の台地には、配送会社などの巨大な倉庫が立ち並んでいる。高層マンションも林立する風景は奇異な感じさえする。新しい高速道路ができると人も物も集まってくるのだろう。

ほどなくして、宝塚北サービスエリアに車は休憩のために停まった。新名神高速に新しくできたＳＡで、なかなか人気の場所らしい。建物の造りは、なるほど宝塚歌劇団の劇場をイメージさせる色とデザインである。店内のお土産売り場などはデパートの売り場と思うほどの高級感がある。トイレにしても便器が一列に並んでいるのではなく、セルのように分割されプライバシーに配慮されている。手洗い場も最新のデザインで見とれてしまう。ゆっくりする時間がなくて残念だったが、運転手さんの帰りにも寄りますとの言葉に促されて乗車した。

今まで通行していた新名神高速はまだ名古屋までつながっていなくて、京都手前の高槻ＩＣで名神高速と合流する。見上げるほど巨大な橋脚が建設中で、そう遠くない時期に高速は完成するらしい。

名神高速は車が多くスピードダウ

石山寺東大門の前で

ンする。京都南ＩＣの出口では車の列ができていた。しばらくして瀬田西ＩＣで高速を降りた。信号の多い一般道を進んでいくと琵琶湖がちらちらと見え始める。以前開催されていたマラソン大会で何度も聞いた瀬田の唐橋を渡ると大きく左に曲がり、瀬田川に沿って進むと石山寺の門前町だ。

ほぼ予定通りの時間に駐車場に着くと元寂聴塾生で石山寺副座主の鷲尾さんが出迎えてくれた。徳島駅を出発したのが午前8時、到着は11時30分頃だった。昼食後は、鷲尾さんがずっと付きっ切りで案内してくれて石山寺を堪能することができた。

午後三時に石山寺を出発し、同じルートで徳島に向かった。約束通り宝塚北ＳＡに寄りお土産を買った。このＳＡは上りと下りの共通になっていて効率がいい設計だと気づいた。その後バスは順調に走り、淡路島で一度休憩をして午後6時過ぎには徳島に帰ってきた。

お天気に恵まれ、楽しい、充実した「石山詣で」となった。

紫式部像

石山寺参り

那賀川眞理

石山寺に到着した私たちは鷲尾さんに迎えられ、早速期間限定で開かれている大河ドラマ館に案内された。撮影に使われた衣装やお香などを使っての五感で楽しめる展示になっていた。

その後改めて東大門へ向かう。鎌倉時代の建築だが、淀殿によって大規模な改築がされたそうだ。その証拠に懸魚（げぎょ・屋根の破風板部分に取り付けられた妻飾りのこと）の左側に豊臣家の桐の御紋があることを鷲尾さんが教えてくださる。

参道を辿り石段を登った先は広く開けていて、正面には石山寺の名前の由来になった硅灰石が隆と立ち、その上には多宝塔が白く輝いていた。思わず「尊い」と思う。手前の建物のひとつ観音堂には、西国三十三個全ての観音様が安置されている。早速お参りする。

そこから少し進んだところにある宝篋印塔の石畳の下には四国八十八ヶ所の砂が敷かれていて、お砂踏みができるようになっている。一周すると四国八十八ヶ所を巡るのと同じ功徳が得られるという。実際に御四国を回った本田さん以外の人は皆揃ってぐるりと歩いた。なんともありがたいことだ。

本堂は永長元年の再建で総檜皮拭きの屋根を頂き、淀殿の寄進により改築されたという礼堂と繋がっている。礼堂は急傾斜の土地のため懸造りといわれる柱組の上に建っている。清水寺に並ぶものでもちろん国宝だ。そこからは美しい渓谷が見られた。

ご本尊様は如意輪観音菩薩だが、三十三年に一度のご開帳で次は二十五年後の二千四九年ということでまた皆で参拝しようと誓う（大石さん以外は皆さんしっかり高齢者ですが）。お隣にはまばゆいばかりに黄金に輝くお姿があった。松本明慶仏師の手による弥勒菩薩座像で、昨年寄進されたばかりだそうだ。今は古色蒼然としているあまたのお像もこのように輝いていたのだろう。異国の人たちが日本を黄金の国だと思ったのもいたしかたないと思った。

本堂の横には紫式部が源氏物語の構想を得たといわれる部屋がある。厳かな佇まいの本堂に傍らに可愛らしい花頭窓がついている。通常は紫式部さんのお人形がいらっしゃるそうだが、お色直し中だとかでご不在だったが、かわりに中の様子がよく見えた。

脇の階段をすこし上がり、多宝塔へ行く。やっぱり本当にカッコいい。「近江八景　石山寺の秋月」に描かれている月見亭は、歴代天皇の玉座になっている。瀬田川を挟んだ山の端に昇る月はさぞ美しいに違いない。

梅林を抜けると山肌が段々に整地された場所にでた。牡丹園と夢の桜（昭和六十年の日航機墜落事故の犠牲者の方と同じ数だけ植えられた桜）の園だった。まだ小さい木もあるが、花々が咲いたら素晴らしい風景になることだろう。

少し下って、紫式部の像の前で皆揃って写真を撮り、更に下ると、小川が流れ小さな池に注いでいる。池の中には小さなお社、八大竜王社がある。石山寺で最も奥にあるのでここまで来る人は少ないのだが今年は辰年ということからなかなかの人気だそうだ。

そのまま道を行くと元の参道に出るが、実は大分端折って書いている。なにしろ石山寺は見所満載なのだ。丁寧にご説明くださった鷲尾さん、本当にありがとうございました。四キロの行程だった。

お色直し後の紫式部人形

お知らせ

事務局では11月下旬の平日、記念会石山寺ツアーを計画しています。大河ドラマ「光る君へ」で話題の紅葉の石山寺に出かけませんか。ご家族、友人ご一緒でもけっこうです。先着35人を募集しますので、事務局までお申込みください。

詳細が決まり次第、個別にご連絡します。

ひろば　会員のたより

夢はかり 朗読会「瀬戸内寂聴物語」

「夢はかり」代表　森　裕子

3月15日、文学書道館二階講座室にて80名のお客さまをお迎えし、開催することができました。

『生誕100年瀬戸内寂聴物語』の著者の徳島新聞記者・柏木康浩さんをゲストにお招きし、前半にトークをしていただきました。柏木さんは、長年にわたり寂聴さんを取材され、徳島新聞の連載記事を元に、昨年の4月にこの本を出版されました。寂聴さんとの思い出も織り交ぜて、とても興味深く楽しいお話をしてくださいました。

朗読の部では、『生誕100年瀬戸内寂聴物語』の中の「寂聴の文学遺産」から柏木さんの4つの文章を紹介し、関連する寂聴作品を4作、その発表順に朗読いたしました。映像も使用し、柏木さんの作品と寂聴作品を交互に朗読することで、寂聴の文学世界を、ご来場のお客様により深く味わっていただきたいという思いの企画でした。

朗読の一作目『花芯』は、発表した際ポルノと酷評され「子宮作家」とのそしりを受け、5年間文芸誌から注文はありませんでした。その後40歳で発表した『夏の終り』は、作家小田仁二郎との半同棲生活や、再会した昔の恋人涼太、小田の妻を加えると四角関係になる私小説です。愛と苦悩を綴ったこの小説で、女流文学賞を受賞します。その続編でもある『みれん』が朗読の二作目です。

三作目『青踏』は、「恋と革命」に共感した寂聴さんが、平塚らいてうを描いています。らいてうの主宰で創刊した日本初の女性だけの文芸誌「青踏」は、古い因習や男性中心の体制にあらがう「新しい女性たち」の象徴でした。

四作目の朗読『寂聴巡礼』は、――幼い昔、春は巡礼の鈴の音が運んで来るものだと思いこんでいた――の一文で始まり、寂聴さんの少女時代の美しい故郷の記憶が格調高く語られる随筆です。

柏木さんの「寂聴の文学遺産」の最後はこう締めくくられています。

――99歳の生涯で、恋愛小説、私小説、随筆など、400冊以上の本を書いた寂聴さん。その文学遺産の意義を丁寧に顕彰していくのが、私たち徳島県民の務めだ。――

夢はかり朗読会　2024年3月15日

瀬戸内寂聴物語

『生誕100年瀬戸内寂聴物語』の著者、柏木康浩さんをお迎えし、トークと寂聴作品の朗読で、寂聴の文学世界を味わいます。

プログラム

I．トーク　　柏木康浩
『生誕100年瀬戸内寂聴物語』著者 徳島新聞社記者

II．朗読

◆「瀬戸内寂聴物語」より
小説「花芯」　女性の性愛 平然と描く　斎藤弘江
「花芯」　瀬戸内寂聴 作　藤村純子

◆「瀬戸内寂聴物語」より
私小説　三角関係の苦悩と孤独　斎藤弘江
「みれん」　瀬戸内寂聴 作　元水　薫

◆「瀬戸内寂聴物語」より
新しい女性を書く　「青鞜」の恋と革命に共感　森　裕子
「青鞜」　瀬戸内寂聴 作　斎藤礼子

◆「瀬戸内寂聴物語」より
巡礼と随筆　古里の記憶　温かな筆致　森　裕子
「寂聴巡礼」　瀬戸内寂聴 作　渡辺久美子

主催：文学と朗読 夢はかり　　協力：瀬戸内寂聴記念会

柏木康浩さん(中央)、朗読者、スタッフの皆さん

寂聴のことば

方丈記を書いた鴨長明や、徒然草を書いた兼好法師の死にざまが正確に伝わっていないのが私には残念でならない。

紫式部や和泉式部や、清少納言の死にざまも、つぶさに知りたいものだ。あらゆる芸術家の死にざまは、政治家や軍人の死にざまよりも私には興味がある。なぜなら、芸術家は、死ぬまぎわまで自己変革をする可能性を最も持った人種だと思うからである。

『遠い風近い風』より（竹内紀子）

事務局からのお知らせ

・新年度になりましたので会費3000円の振込をお願いします。
阿波銀行　蔵本支店
普通　1229692
清重康代
徳島大正銀行　加茂名支店
普通　8601495
瀬戸内寂聴記念会
会計　清重康代

・機関誌「寂聴」3号の原稿締切は9月15日です。

・記念会のホームページが5月15日公開予定です。

瀬戸内寂聴記念会　事務局
〒770-0856 徳島市中洲町3-40-802
Fax　088-661-3292
email　norikomizugame@yahoo.co.jp